

実践レポート

研究活動における大学院生（修士課程）の成長を促す 経験に関する検討

— 成長実感ワークショップの取り組みを通じて —

大 田 桂一郎・朝 子 真 衣
勝 屋 藍 太・本 田 容 子
森 山 寛

要 旨

本実践レポートでは、立命館大学大学院生の研究活動における成長要因の把握を目的とし、成長実感ワークショップ（今川ほか2019）を一部改変し、実施した結果とその解釈、今後の課題について報告する。大学院生9名に対し、ワークショップを行った結果、9名からは122の「身についた力・知識」、「経験（エピソード）」を得ることができた。「身についた力・知識」がどのような「経験（エピソード）」から得られたのかを把握するため、「経験（エピソード）」の分類を、KHcoderを用い、テキストデータから、テキストマイニング（クラスター分析）を試みた。その結果、10の経験に分類することができた。

キーワード

大学院生の成長、研究活動、経験、成長実感ワークショップ

1. 問題設定と背景

2019年1月22日に中央教育審議会大学分科会より「2040年を見据えた大学院教育のあるべき姿～社会を先導する人材の育成に向けた体質改善の方策～」(審議まとめ)がまとめられた。その中では、大学院の学生が身に付けるべき能力について、平成27年大学院審議まとめ¹⁾に引き続き、高度な専門的知識と倫理観を基礎に自ら考え行動し、新たな知及びそれに基づく価値を創造し、グローバルに活躍する人材の姿である「知のプロフェッショナル」が提示されている。それに加え、専門分野問わず、共通的に身に付けるべき能力を明確化し、「知のプロフェッショナル」の十全な育成に向けた大学院教育の改善につなげていく必要があることが触れられている。「知のプロフェッショナル」に求められる能力については、「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）」(中央教育審議会、2018)で述べられた学士課程を通じた普遍的なスキル・リテラシーを高い水準で備えていることに加え²⁾、「最先端の知にアクセスする能力」「自ら課題を発見し設定する力」「自ら仮説を構築し、検証する力」「社会的・経済的価値を判断・創出する

能力」「高度な英語力を含むグローバル化に対応した優れたコミュニケーション能力」「倫理観」「マネジメント能力」など、大学院の高度な教育研究を通じてこそ身に付くことが期待される今後の社会を先導する力、様々な場面で適用するようなトランスファラブルな力を備えていることが求められる。

では、実際に大学院教育を通じてどのような能力・力量形成がなされているのか。都築（2010）においては、大学院教育の現状把握を通じた高等教育システムの中での大学院の今日的な位置づけを明確化することとともに大学院で学ぶ大学院生についての成長について検討することを目的としたワークショップを実施した記録がまとめられている。その中では、問を立てることができることが研究能力の中核であること、大学院生自身が自分自身で主体的に研究を実施していくこと、大学でアカデミック・コミュニティをどのように立ち上げていくか、キャリア形成という観点から大学院教育はどのように位置づくるのかという問いの転換などのポイントが重要であるとまとめられている。

玉井ほか（2011）においては、教職大学院においてではあるが、大学院生の学びの軌跡と成長について、修了生対象の振り返りアンケートから考察を行っている。そこでは、教育実践を深く見直すきっかけとなる授業・ゼミの存在や教育に対する視野の広がり、大学院生同士のネットワークの広がりが修了後も引き続いて学びを発展させていると考察している。

佐渡島ほか（2014）では、ライティング・センターにおける大学院生がライティングチューターを行う上での成長という限定的な内容ではあるが、大学院生の成長については、熟達するにつれての「状況に敏感に対応し、文脈化された思考」「人と人との相互作用の場面、文脈における活動過程での反省的思考」とまとめている。また同研究の中で大学院生の実際の学びの実態をとらえる研究がまだ行われていないことも触れている。

以上の先行的な研究や記録から、大学院生に対する学びの実態、研究活動における成長要因の把握は、限定的であり学士課程教育よりも先進的ではないことが分かる。さらに立命館大学が2018年度に実施した「第2回教学実践フォーラム～人文社系修士課程の大学院生（日本語基準）を対象とした研究指導における課題と改善について～」³⁾の議論においても、大学院生の学びに対する研究・調査は進んでいないことについて言及されている。そこで、先行研究や記録、当該実践フォーラムで言及された内容を受け、大学院生（修士課程）の研究活動における成長一因の把握を目的として成長実感ワークショップ（今川ほか、2019）を一部改変し実施した。本実践レポートでは、実施結果とその解釈、今後の課題をまとめ、報告する。

2. 実践方法

成長実感ワークショップ（今川ほか2019）は、主に課外自主活動における成長実感を把握する目的であったため、大学院生に対して事前ヒアリングを実施し、表1の通り、一部改変を加えて実施した。成長実感ワークショップに参加してくれた大学院生は、立命館大学大学院キャリアパス支援推進スタッフ⁴⁾を中心に、合計で9名であった。研究分野は、人文社系研究科所属が5名、自然科学系研究科所属が4名であり、修士課程の1回生が3名、2回生が6名であった。ワークショップは、3日間に分けて実施し、1日目に人文社会研究科所属の大学院生1名に事前

ヒアリングを兼ねて実施、2日目に自然科学系研究科所属の大学院生、3日目に残りの人文社系研究科所属の大学院生に対して実施した。

表1 成長実感ワークショップ ver2 の流れ

順	内容	時間
①	趣旨説明・自己紹介	5分
②	どのような研究をしているかの紹介	10分
③	自身の研究活動において「身についた力・知識」について書き出し	5分
④	「身についた力・知識」の貼り付けと一言ローテーション	30分
⑤	さらに伸ばしたい重要な力・知識についての詳細な説明	30分
⑥	ワークショップの感想	5分

※ 下線部が今川ほか（2019）からの変更箇所

ワークショップは、はじめて顔をあわせる大学院生同士もいたため、成長実感ワークショップ（今川ほか2019）で述べられている方法と同様に、徐々に話していく量が増えていくようにデザインした。はじめにファシリテーターの自己紹介と趣旨説明を行い、ワークショップの場でのデータの利用許諾について説明し、諾否の記入を求めた。そのあと参加者の自己紹介として研究科・回生・名前・研究内容と研究科へ進んだ動機について話してもらった。続いて、「用意したポストイット一つにつき一つの身についた力・知識を記してください。」という説明のもと、大学院での研究活動においてどういった力・知識が身についたかを書き出してもらった。その後、書き出してもらった全ての「～力」や「～知識」について、一人ずつ模造紙に貼りつけてもらいながら、ローテーション制で説明をしてもらった。一通りローテーションが終わったのち、「さらに伸ばしたい重要な力・知識」を絞ってもらい、その経験（エピソード）について語ってもらった。

3. 分析方法と結果

3日間、計9名に行ったワークショップの内容を当人らの承諾を得て録音、その音声をテキスト化し、身についた力・知識に対しての経験（エピソード）を下表の形式でまとめた。

表2 身についた力・知識に対しての経験（エピソード）のまとめ方（一部）

実施日	研究科	回生	身についた力・知識	経験（エピソード）（どのような経験を通じて身についたか）
2019年7月4日	法学研	M1	時事問題調査力	AIなどを研究のテーマとしているので、時事、最新情報を常に入手しておく必要がある・・・
2019年7月4日	法学研	M1	調査力	先行研究を調べることを通じて。まずは先行研究を読み、解釈し、まとめ上げることを指導されている・・・
・・・	・・・	・・・	・・・	・・・

表2のようにまとめた結果、ワークショップを実施した9名からは122の「身についた力・知

識」、「経験（エピソード）」を得ることができた。その後、経験（エピソード）を分類するため、KHcoder⁵⁾を用い、テキストデータから、テキストマイニング（クラスター分析）を行った。クラスター分析により、経験（エピソード）を10クラスターに分類し、分類された記述内容からクラスターの解釈を行った。なお、コーディングルール⁶⁾については、可能な限り大学院生の実態に近づけるため行っておらず、クラスターの数については、Auto 設定で出力した10クラスターをはじめとし、7クラスターから12クラスターまで出力した結果、筆者ら複数人で確認し、10クラスターが解釈に適していると判断した。下図は分類したデンドログラムである。

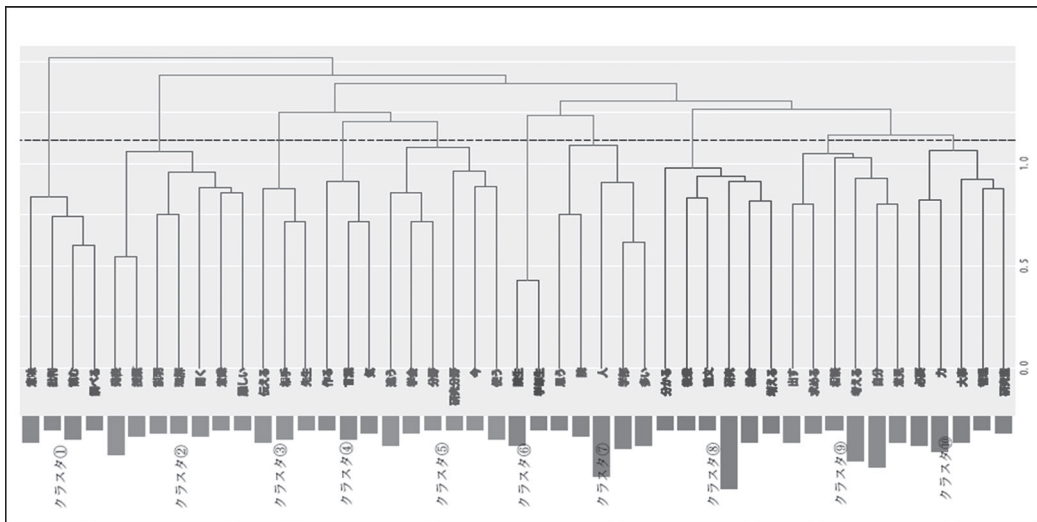


図1 エピソードのテキストデータからのクラスター分析（デンドログラム）

各クラスターについては、分類された記述内容から、次のとおり解釈を行った。なお、括弧内の記述は、大学院生が話した前後関係や文脈から、筆者らが追記したものである。

クラスター①「先行研究や文献を調べる経験」

代表的な記述として、「先行研究を調べる、解釈する」「自らで（先行研究を）調べ、自ら解釈、批判をする」「判例や先行事例の批判的な意味を考える」「文献を読むことを通じて」などの先行研究やそれに関わる文献を調査するという記述が集約されているため、「先行研究や文献を調べる経験」と解釈した。

クラスター②「インタラクティブな研究発表を通じた経験」

代表的な記述として、「授業での発表を通じて、質問や意見、アドバイスをしっかり聞く」「発表に対しアドバイスをもらうためには、論点を明確にし、端的に伝える能力が授業を通じて養われる」「（発表で）質問や意見を出してもらうための工夫をする」といった授業内外での研究発表、それを傾聴する経験に関する記述が集約されているため、「インタラクティブな研究発表を通じた経験」と解釈した。

クラスター③「他者とのコミュニケーションを通じた経験」

代表的な記述として、「（同僚の院生や教員に対し）分かりやすく伝える」「（相手に）分かることばで伝える」「相手のことを理解しつつ、ディスカッションできる話し方、説明の仕方」「相手の背景を踏まえて理解度を確認する」など、他者とのコミュニケーションを意識した記述が集約されているため、「他者とのコミュニケーションを通じた経験」と解釈した。

クラスター④「研究上の言語表現を学ぶ／注意する経験」

代表的な記述として、「（文章／発表でも）言葉の使い方に注意するようになった」「（大学院に進学して）てにをはを含めた言葉が気になる／注意する」「研究分野などのバイアスにならないように言葉や表現に気を付けている」など、研究を意識した文章表現、口頭発表のことばに関する記述が集約されているため、「研究上の言語表現を学ぶ／注意する経験」と解釈した。

クラスター⑤「研究分野の多様性に触れる経験」

代表的な記述として、「学会でも分野が異なる研究者と交流する機会があり、今まで知らなかった情報を知り、視野が広がる」「分野によって（研究上の）基準、水準が違うため、応用力が求められる」といった研究分野における違い、他の研究分野を知ることでの視野の広がりなどの記述に集約されているため、「研究分野の多様性に触れる経験」と解釈した。

クラスター⑥「大学院生になったと自己認識する・自覚する経験」

代表的な記述として、「院生になると待っていてもフォローしてくれない」「院生になると誰にでもわかるように資料を作らないといけない」「院生になると学部生の卒論を見るので理解力や教え方が重要になる」といった「院生になると」「院生になって」という修飾語の記述に集約されているため、「大学院生になったと自己認識する・自覚する経験」と解釈した。

クラスター⑦「学部から大学院への学びの転換を考える経験」

代表的な記述として、「学部のときより（本を）読むようになった」「学部のときはレポートを書くときでもあまり考えられていなかった」といった大学院に入学し、学部のときとの違いを意識した回帰的な記述が集約されていたため、「学部から大学院への学びの転換を考える経験」と解釈した。

クラスター⑧「インタラクティブな研究活動を通じた経験」

代表的な記述として、「研究発表する機会が多いため、後輩に対して指導する機会がある」「話すときもつながりを意識し、枠組みで考えるくせがついた。それは論文を構成することに通じる」「膨大なデータを整理し、分析する」「目的があって道のりとしての研究を意識した」「研究はうまくいかないことが多い」など、研究そのものに関する記述や研究を経た経験などの記述に集約されるため、「インタラクティブな研究活動を通じた経験」と解釈した。

クラスター⑨「研究成果を出すため主体的に行動する経験」

代表的な記述として、「何を明らかにするかを考える」「意味づけることの意味、なぜ、どうしてを考えるくせはついた」「(大学院では) 自分から動かないといけない状況になる」「(学会や紀要、論文などの) 成果を出していく」など研究活動において、主体的な行動を心掛ける記述に集約されているため、「研究成果を出すため主体的に行動する経験」と解釈した。

クラスター⑩「研究環境へ適応するための経験」

代表的な記述として、「研究室内で普段から困っていること、他人の助けを求めることは大事」「研究室内で(研究) 結果をどのように管理するか」「(研究に必要な知識は) 研究室で活動していく上で必要になる」といった研究室での関係、環境や施設を管理・適応に関する記述に集約されているため、「研究環境へ適応するための経験」と解釈した。

4. まとめ

成長実感ワークショップを一部改変し、大学院生(修士課程)が研究活動を通して、どのような成長をしているのかを検証した結果、ワークショップに参加した大学院生(修士課程)は、主に下表の経験を通して、成長していることがわかった。

表 3 大学院生(修士課程)の成長経験

No	経験
1	先行研究や文献を調べる経験
2	インタラクティブな研究発表を通した経験
3	他者とのコミュニケーションを通した経験
4	研究上の言語表現を学ぶ／注意する経験
5	研究分野の多様性に触れる経験
6	大学院生になったと自己認識する・自覚する経験
7	学部から大学院への学びの転換を考える経験
8	インタラクティブな研究活動を通した経験
9	研究成果を出すための主体的な行動
10	研究環境へ適応するための経験

5. おわりに

今回、大学院生 9 名に対し、ワークショップを行った結果、9 名からは 122 の「身についた力・知識」、「経験(エピソード)」を得ることができ、その結果を分析することで、10 の経験から大学院生(修士課程)が成長していることがわかった。しかしながら、分析については、あくまで大学院生がワークショップで語った音声をテキスト化したテキストデータを用いたに過ぎない。今回析出された 10 の経験のみが、大学院生(修士課程)の成長に起因しているのではなく、あ

くまで成長一因の分析であることに本実践の限界がある。残されている課題として、個々の研究指導教員の丁寧な指導や研究科カリキュラムの影響、テキストを用いて分析した結果がいかに関大学院生の実態と整合性が取れているかの検証、『博士号のとり方』（E.M. フィリップスら 2018）や英国で構築された Vitae Researcher Development Framework などの海外の研究知見と接続し発展させることが必要であろう。

末筆ではあるが、本実践が少しでも大学院生の研究活動における成長要因把握の一助になれば幸いである。

謝辞

本実践レポートをまとめるにあたり、ワークショップに参加してくれた大学院生 9 名に感謝いたします。また、2018 年度より 2 年間、学校法人立命館人事部人事課の職員共同研修として取り組ませて頂いた内容となります。人事課の研修担当の方々にも感謝の意を記します。それに加えて、本実践レポートをまとめるにあたり、立命館大学スポーツ健康科学部／教育・学修支援センターの河井亨先生に貴重なアドバイスを賜りました。心より御礼申し上げます。

注

- 1) 「未来を牽引する大学院教育改革～社会と協働した「知のプロフェッショナル」の育成～」(審議まとめ) (2015 年 9 月 15 日 大学分科会)
- 2) 「2040 年に向けた高等教育のグランドデザイン (答申)」では、今後の社会を支える人材には、学士課程を通じて、「論理性や批判的思考力」「広い視野」「コミュニケーション能力」「他者と共生する力」に加え、「創造力」「変化への適応力」「主体性と責任感を備えた行動力」「データ処理、活用能力」など、普遍的なスキル・リテラシーを身に付けることが求められている。
- 3) 2018 年度第 2 回教学実践フォーラム「人文社系修士課程の大学院生（日本語基準）を対象とした研究指導における課題と改善について」<http://www.ritsumeai.ac.jp/itl/news/article.html?id=73> (最終閲覧 2020 年 8 月 31 日)
- 4) 大学院キャリアパス推進室が開催する各種セミナー等の企画に参画・支援を行う大学院生スタッフ。各種セミナー等の参加者が円滑にコミュニケーションを図れるよう支援を行い、参加者同士の交流の手助けを行うとともに、CPS 自身も参加者との交流を図ることで、学年、研究科を超えたネットワークを構築し、前に踏み出す力（主体性、実行力）、考え抜く力（課題発見力、計画力、創造力）、チームワーク力（発信力、傾聴力、柔軟力）の醸成を目的とし活動している。「2020 年度立命館大学大学院キャリアパス支援スタッフ (CPS) Carrer Path Support Staff」http://www.ritsumeai.ac.jp/ru_gr/g-carrer/ferrow/master/article.html?id=28 (最終閲覧 2020 年 8 月 31 日)
- 5) テキスト型（文章型）データを統計的に分析するためのフリーソフトウェア <https://kxcoder.net/> (最終閲覧 2020 年 8 月 31 日)
- 6) 語の条件指定。例えば、「人の死」という語に「亡くなる」、「死ぬ」、「殉死」などの意味を含めるような分析上のルールを設定できる

参考文献

E・M・フィリップス、D・S・ビュー、角谷 快彦『博士号のとり方—学生と指導教員のための実践ハンドブック—』名古屋大学出版会 2018 年

- 中央教育審議会「2040 年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）」2018 年 11 月 26 日
- 中央教育審議会大学分科会「未来を牽引する大学院教育改革～社会と協働した「知のプロフェッショナル」の育成～（審議まとめ）」2015 年 9 月 15 日
- 中央教育審議会大学分科会「2040 年を見据えた大学院教育のあるべき姿～社会を先導する人材の育成に向けた体質改善の方策～（審議まとめ）」2019 年 1 月 22 日
- 樋口 耕一『社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して—』ナカニシヤ出版 2014 年
- 今川 新悟、河井 亨、真田 樹義「課外自主活動における学生の成長：ワークショップによる成長調査を通じて」『立命館高等教育研究』第 19 号 2019 年 p111-121
- 立命館大学教育開発推進機構「2018 年度 第 2 回教学実践フォーラム」
<http://www.ritsumeit.ac.jp/itl/news/article.html?id=73>（最終閲覧 2020 年 8 月 31 日）
- 佐渡島 紗織、太田裕子「文章チュータリングに携わる大学院生チューターの学びと成長—早稲田大学ライティング・センターでの事例—」『国語科教育』第 75 巻 2014 年 p64-71
- 玉井 康之、前田 輪音、藤森 宏明「修士生対象の振り返りアンケートからとらえられる院生の学びの軌跡と成長」『北海道教育大学大学院高度教職実践専攻研究紀要』創刊号 2011 年 p83-87
- 都築 学「大学院教育の課題と院生の成長」『青年心理学研究』第 22 号 2010 年 p98-101
- Vitae, “About the Vitae Researcher Development Framework”
(<https://www.vitae.ac.uk/researchers-professional-development/about-the-vitae-researcher-development-framework>, 2020.8.31)

Examination of Experiences in Research Activities That Promote the Development of Graduate Students in the Master's Programs

OTA Keiichiro (Administrator, Office of Academic Affairs Ritsumeikan University)

ASAKO Mai (Administrator, Office of Graduate Studies Ritsumeikan University)

KATSUYA Aita (Administrator, Office of General Education Ritsumeikan University)

HONDA Yoko (Administrator, Office of Student Affairs at Biwako-Kusatsu Campus Ritsumeikan University)

MORIYAMA Hiroshi (Administrator, Office of Graduate Studies Ritsumeikan University)

Abstract

This practical report aims to understand the development factors in the research activities of graduate students at Ritsumeikan University. To this end, the Workshop (Imagawa et al. 2019) was modified and implemented. This report reports the results of the workshop, interpretations of the results, and future issues. As a result of conducting the workshop for nine graduate students, 122 experiences (episodes) that helped them acquire academic skills and knowledge were obtained.

To understand what kind of experiences (episodes) helped them to acquire academic skills and knowledge, we performed text mining analysis (cluster analysis) on text data using KHcoder to classify the experiences (episodes). As a result, the experiences were classified into 10 clusters.

Keywords

Development of graduate students, research activities, experiences, Workshop

